

記念講演

東京女子医科大学学会60年の歩み

東京女子医科大学 図書館長 (解剖学・発生生物学)

アイ カワ エイ ソウ
相 川 英 三

(受付 平成7年1月17日)

The 60th Anniversary: The Society of Tokyo Women's Medical College**Eizo AIKAWA**Director of Librarian (Department of Anatomy and Developmental Biology),
Tokyo Women's Medical College

On the occasion of the 60th General Meeting of the Society of Tokyo Women's Medical College, we would now trace the 60-year history of the society with the tradition of our college.

It was to improve the status of women doctors that the society was founded—this was also the spirit of the founder of our college, YOSHIOKA Yayoi.

The society, firstly named Tokyo Medical Society for Women, started functioning in 1930 and held the 1st General Meeting in 1934. It beared difficulties during and after the World War II. Tokyo Women's Medical College opened as a medical university under the reformed system of education on April 1952 and the 18th General Meeting was held within the year.

President YOSHIOKA Morimasa made reforms in the administration of the society to get its activity more lively when the 50th General Meeting was held in 1984.

Although the member, graduates of 1,500 at first, has increased and decreased in the course of history, it regularly counts over 2,000 including 50 honorary members at the present.

はじめに

東京女子医科大学学会第60回記念総会を迎えるにあたり、女子医大の伝統ある歴史を繙くことにより、東京女子医科大学学会（以下学会）の60年の歩みをたどってみることにする^{1)~3)}。

学会の設立には、本学創立者の吉岡彌生学頭の建学の精神が貫かれ、女医の地位向上という側面が色濃くあらわれている。

昭和5年（1930）に東京女醫學會として発足した学会は昭和9年（1934）第1回総会を開催した。戦中戦後の混乱期も絶えることなく維持され、新制東京女子医科大学の認可をまち、昭和27年（1952）第18回総会を迎えることができた。

吉岡守正会長による昭和59年（1984）第50回記念総会を転機に学会の運営もより整備され活性化が図られるようになった。

当時1,500余名の卒業生らを対象として始まった学会会員数は幾多の変遷を迎え、現在も名誉会員50名を含み常時2,000余名の会員数で維持されている。

1. 東京女子医科大学学会の名称の変遷

昭和5年（1930）9月 東京女醫學會の設立並びに機関誌『東京女醫學會雑誌』の発刊を決定する。

同年11月24日 東京女醫學會第1回例会兼発会式が東京女子醫學専門學校の大講堂にて開催される（図1, 2）。

この大講堂は、大正11年（1922）4月竣工の木造三階建の建物で、三階部分が800人収容の大講堂となっていた。昭和20年（1945）4月13日の空襲で、東京女子醫學専門學校の大部分の建物と共に焼失した。



図1 東京女子醫學専門學校の全景 昭和2年(1927) 当時

図2 大講堂

昭和6年(1931)3月25日 『東京女醫學會雜誌』第1巻第1号発刊される。

昭和9年(1934)4月6日 4月4日に竣工した臨床講堂の落成記念を兼ねて、東京女醫學會第1回総会が開催される⁴⁾⁵⁾。

昭和18年(1943)3月10日 東京女醫學會評議員会において、会名および雑誌名の変更が決議される。東京女醫學會は日本女子醫學研究會に、『東京女醫學會雜誌』は『女子醫學研究』へと改題される。

同年4月23日 日本女子醫學研究會第1回例会を開催する。

同年5月25日 『女子醫學研究』を通巻第13巻2号として発刊する。

昭和27年(1952)1月 日本女子醫學研究會を東京女子医科大学学会と改称する。『女子醫學研究』を『東京女子醫科大學雜誌』と改題する。

同年2月25日 『東京女子醫科大學雜誌』通巻第22巻1号を発刊する。

2. 東京女醫學會

東京女醫學會は、それまでに行われていた学術



図3 『東京女醫學會雜誌』発刊之辭

集談会が発展的に解散され設立されたものである。

この時、「東京女醫學會会則」が制定され今日の学会会則の基礎が形作られたのである。第2条には医学の進歩を図ることがその目的として掲げられ、目的を達するための活動には集会および雑誌の発行(第3条)が義務づけられた。

集会は例会を月1回開催すること、年1回総会を開催すること、評議員会は年3回以上開催すること等第11条に定められた。

会員の構成は(第5条)、至誠會會員、本会の目的に賛同する医師およびその他の篤志家からなっている。

会長には、吉岡彌生東京女子醫學専門學校校長があたり、副会長には吉岡正明同校副校長が選出された。その他若干名の評議員が同校教授、講師から選ばれたのである。

第12条に定められた機関誌『東京女醫學會雜誌』は、「本雑誌の使命は、校友諸姉相互研究の機関たることに有之」⁶⁾と謳い、即ち主に卒業生つまり女性医師達に研究発表の場を提供することを目的とした(図3)。

寄稿者は原則として至誠會会員および東京女子醫學専門學校教職員に限られていたのである。当時卒業生は1,500余名を数えた。

東京女子醫學會は昭和5年(1930)11月から昭和18年(1943)3月まで、戦時体制で学会が改称を余儀なくされるまで続いた。

〔東京女醫學會第1回總會〕

昭和9年(1934)4月6日、新築成った東京女子醫學専門學校臨床講堂において、立錐の余地の無い盛況のなか、40分の休憩をはさみ午前8時から午後5時半まで開催された。吉岡彌生学会会長は開会の辞で、現今の女医の究学心の向上を喜び「研究すれば立派にできるという信念を持たたたい」⁷⁾と激励の詞を述べたのであった。

特別講演が設けられ、佐藤 清病理学教授の「白血球の系統的分類と其臨床的意義について」、今村明光内科教授の「腸チフスおよび類似熱性疾病的診断」の2題が発表された。また、各科より33題の研究発表があり、そのうち31題は、東京女醫學校および東京女子醫學専門學校の卒業生によるものであった⁸⁾(図4)。

翌年から、毎年秋に總會が開催され、昭和15年(1940)の第7回總會からは、日程が二日間に亘るようになり、毎回、主に卒業生による30数題の研究発表と、教授による特別講演2題という形式が定着していった。図5は第7回總會で挨拶する吉岡彌生学頭である。当時は、東京女子醫學専門學校校長であり、東京女醫學會会長を務めた。

東京女醫學會として最後の總會となった昭和17年(1942)の第9回總會では、特別講演として、医化学教室の戸田クニ教授が「動物体内に於けるコレステリン類の機能に就いて」と題して発表した。戸田クニ教授は卒業生として初めて、母校の教壇に立った人で、大正5年(1916)卒業、昭和4年(1929)から6年(1931)にかけて学校が派遣した本学最初の留学生となり、ドイツへ留学した。帰国後、昭和7年(1932)に教授、昭和9年(1934)に医学博士となったが、昭和21年(1946)11月肺炎のため逝去した(図6)。

この間、東京女醫學會例会は第1回例会が昭和5年(1930)11月24日に開催され、昭和18年(1943)

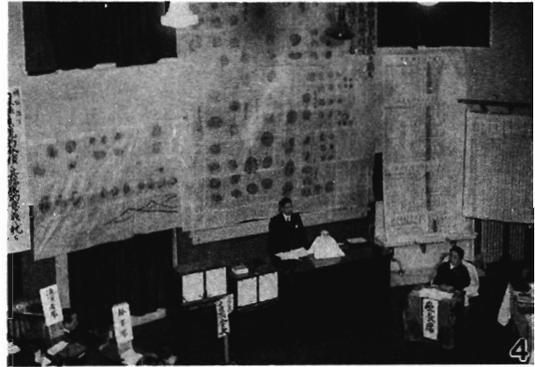


図4 東京女醫學會 第1回總會 昭和9年(1934)4月6日 佐藤 清先生

図5 東京女醫學會 第7回總會 昭和15年(1940)10月19, 20日 吉岡彌生会長の挨拶

図6 東京女醫學會 第9回總會 昭和17年(1942)戸田クニ先生

4月23日に開かれた第69回例会まで活発に行われ回を重ねた。

3. 日本女子醫學研究會

東京女醫學會は戦時下発展的に解消され、昭和18年(1943)4月、日本女子醫學研究會が設立された。その設立の目的は、女子に関する医学の進歩並びに日本人女性の体質と体格の向上を図るこ

とにあった⁹⁾。

日本女子醫學研究會が設けられたのは、第二次大戦下、総力戦体制のもと国家の要請に基づく措置であった。戦争の長期化による人的損害の増大という状況にあって、女性には人口増加とさらに労働力提供が求められていた。政府は「生めよ殖やせよ」のスローガンのもと、経済的措置等の結婚奨励策によって人口増加を図ろうとしていた。

日本女子醫學研究會は、会員数の増加や会の回数を重ねるといった量的なことばかりではなく、質の向上が必要であった。また、女性の徴用をも覚悟せざるを得ない状況下、母体としてだけでなく労働力としての女性という観点から、女性の身体に関する科学的調査研究を積み重ねて「女子医学」という医学の新分野を開拓し、その体系を整備することを当面の目標とした¹⁰⁾。

雑誌名も『東京女醫學會雑誌』から『女子醫學研究』に変更された。それは物資欠乏の折から、出版の統制、学術雑誌の統廃合が行われ、一学内の機関誌には紙が割り当てられなかったための措置であった。

『女子醫學研究』では、寄稿者に「女子医学」に寄与する研究を求め、昭和19年(1944)4月の評議員会では、「女子の体質に関する総合的研究」を各教室分担で行う決定もなされたが、以上の新方針の軌道に乗る前に戦争終結を迎えたためか、研究のテーマや内容に特殊な変化は見られなかった(図7)。

例会、総会もそれぞれ名称が変更され、日本女子醫學研究會の第1回例会は昭和18年(1943)4月23日に開かれ、同じく第1回総会は同年10月23、24日開催されている。従来の同窓会的な女医のための研究機関から、女子に関する医学の総合的研究機関へと学会の性格の変化が図られたのであった。

〔戦時中から戦後にかけての活動〕

日本女子醫學研究會は、第二次大戦を通して昭和18年(1943)4月から昭和26年(1951)12月までの間活動し、その学会の運営はこの時期困難を極めた。しかし集会や雑誌発行はできるかぎり定期的に継続しようと努力がなされ、例会も昭和20



図7 右:「東京女醫學會雑誌」(第1巻1号), 左:「女子醫學研究」(第14巻4号)

年(1945)6月28日に第14回が開催され、終戦後にもいち早く第15回例会が同年11月9日に開かれた。

一方、総会は昭和19、20年(1944, 1945)には開かれることなく、戦後、昭和21年(1946)10月20日になってようやく、日本女子醫學研究會としての第2回総会を開催することができたのである。昭和26年(1951)7回目の日本女子醫學研究會総会は、第17回総会とされ、昭和9年(1934)の東京女醫學會第1回総会から通算して数えられることとなった。

機関誌『女子醫學研究』は、昭和19年(1944)10月25日発行の第14巻4号が戦争中の最後の号となり、昭和20年(1945)10月25日発行の第15巻1・2号が戦後になって最初の号となった。しかし年4冊の発行が可能になるまでには、昭和26年(1951)の第21巻の発行を待たなければならなかった。これらの戦中、戦後の困難な時期を乗り切ることができたのは、昭和8年(1933)から昭和38年(1963)まで学会誌の編集主幹を務めた故吉岡博人名誉理事長の尽力が大きかったと言われる。

4. 東京女子医科大学学会

日本女子醫學研究會から東京女子医科大学学会への改称については、昭和27年(1952)の学制改革等の社会状況をみなければならない。

昭和27年(1952)2月、新制医科大学として学校法人東京女子医科大学の設置が認可され4月に開校された。同じく5月には大学は創立50周年記

念式典を挙げるに至った。

これら東京女子医科大学の節目の時期にあたって、「ひとり学会のみが旧態依然であり得ない」¹¹⁾とし、戦時体制下の異例の措置であった「日本女子醫學研究會」および『女子醫學研究』は、それぞれ「東京女子医科大学学会」、『東京女子医科大学雑誌』と改められた。東京女子医科大学を代表する権威のある学会、雑誌とすることを旨としたのである。

同年12月には「東京女子医科大学学会会則」¹²⁾が改訂され運用されることとなった。第2条には学会の目的が新しく医学および医術の進歩向上を計ることとされた。目的を達成するための集会は、例会の開催を毎月1回とし、総会を年1回開くこと、新しく幹事会を設け事務関係協議会とし、年2回以上評議員会を開くこと等が第14条に定められている。

会員の資格は、本会の目的に賛同する医師および評議員の推薦による者とされ、「東京女醫學會」時代には、まず第一に卒業生を対象とし、女性医師に学術活動の場を提供するのが主眼であったが、「東京女子医科大学学会」では、会員資格者を広く一般に求めた。

第7条には会費を納入する普通会员と、本会に対して特別な功勞のある者で評議員の推薦による名誉会員が定められている。

役員構成は会長が東京女子医科大学学長、副会長には評議員が推薦した者、ほかに会長が指名する幹事を若干名おくことができ、会計、編集その他の事務を担当することとされる。

戦後ようやく世の中も落ち着きを取り戻した昭和29年(1954)には、記念すべき第20回記念総会を迎えることができた。図8前列中央が、学会会長の久慈直太郎女子医大学長。その左が、学会副会長で、女子醫専時代長く副校長を務めた吉岡正明附属病院長。久慈学長の右隣が、昭和8年(1933)以来、学会の主幹を務めていた吉岡博人教授である。

これまで旧臨床講堂で行われていた学会総会は、昭和39年(1964)の第30回総会の頃には、例会、総会も旧本部棟の一階の講堂に移されて開催



図8 東京女子医科大学學會 第20回記念総会（一号館前にて）昭和29年（1954）10月



図9 東京女子医科大学学会 第38回総会 昭和47年（1972）10月1日 吉岡博人会長の挨拶

されている。この建物は昭和35年(1960)、至誠会より寄贈されたもので、弥生記念講堂と糖尿病センター建設のため、昭和60年(1985)には取り壊された。

昭和40年(1965)4月学長に就任した吉岡博人教授が会長になった。図9は第31回総会で座長を務める吉岡博人会長である。なお、佐藤イクヨ教授(耳鼻咽喉科)が昭和38年(1963)から昭和55年(1980)まで学会主幹を務めた。

昭和41年(1966)の第32回では中山恒明教授がシンポジウム“癌の臨床”で「消化器癌の外科的治療」と題して報告した。中山教授は、同年1月、本学の客員教授として迎えられ食道外科の世界的権威であった。その構想のもとに、昭和40年(1965)7月消化器病センターが開設された。

また、昭和46年(1971)の第37回総会のシンポジウムでは、榊原 任教授がテーマ“臓器移植”



図10 東京女子医科大学学会 第50回総会 昭和59年
(1984) 9月29日 吉岡守正会長の挨拶

で司会を務めている。榊原教授は、昭和24年(1949)7月、東京女子醫學専門学校教授に就任。昭和26年(1951)本学外科において「ポタロー」氏管開存症の手術に初めて成功し、翌27年(1952)には大動脈狭窄症の手術に成功して、日本の心臓外科の発達に大きな貢献をなした。昭和30年(1955)5月に開所した日本心臓血圧研究所の初代所長を昭和48年(1973)4月まで務めた。

昭和59年(1984)9月29日には、前年就任した吉岡守正会長のもと第50回記念総会を迎えた。吉岡守正会長が、昭和58年(1983)4月学長、学会会長に就任して以来、学会運営の一部が整備され現在に至っている(図10)。

学会会則は、数回の改訂を経て現在では、会員も東京女子医科大学在学生在が準会員として加えられている。平成6年(1994)3月現在の会員数は準会員605名を含み、2,023名を数えている¹³⁾。

第50回総会から教育講演が始められたが、至誠会東京都支部の総会が、学会総会と同時に開催されることもあり、卒業生にも配慮したテーマで行われている。

例会はこれまでの年6回の開催から年4回の開催とされ、東京女子医科大学学会内規の第3条の2では2月、5月、6月、11月に例会の開催月が定められ、それぞれの月の例会には定例の行事が挙行されることになった。

2月：山川寿子研究奨励金および佐竹高子研究奨励金授与式と前年度受賞者の研究発表が合わせ

て行われる。

5月：吉岡彌生学頭の命日(5月22日)に開催され、吉岡彌生研究奨励金授与式と前年度受賞者の研究発表、吉岡彌生記念講演が取り行われる。

6月、11月は一般演題、学術講演、シンポジウム等が開催される。

評議員会は年1回以上開催へと改訂された(第12条)。

機関誌『東京女子醫科大學雑誌』は、昭和30年(1955)第25巻より毎月1回発行され、平成元年(1989)から、本学教職員の研究業績を年1回特別号として発行することとした。また、機関誌編集会議において論文の査読制が採用されたことは画期的なことであった。

昭和53年(1978)の第44回総会から記念盾が使用された。織畑秀夫名誉教授意匠のもとに、この記念盾第1号は、学会特別講演者および各科招待の学外講演者・外国講演者に主催教室の希望により贈呈された。現在では、坂元正一母子総合医療センター名誉所長意匠の記念盾第2号が、平成元年(1989)5月より使用されている。

ここで、新しく取り入れられたシンポジウムについて、そのテーマの変遷を調べることによって、医学界の研究の推移を見ることができると考え、その一覧を掲げてみる(表1)。また、戦前「東京女醫學會」当時の座談会も参考として掲げておく(表2)。

〔吉岡彌生記念講演について〕

*毎年5月22日の学会例会で、吉岡彌生研究奨励金授与式に引き続き「吉岡彌生記念講演」が行われる。

*本学創立者吉岡彌生の建学の精神を後世に継承し記念するために設けられた。

*第1回「彌生メモリアルレクチャー」は昭和60年(1985)、作家の澤地久枝が「いのちの重さ」と題して講演した(図11)。

翌年の第2回からは当時の吉岡博人理事長の提案で、講演会の名称が「吉岡彌生記念講演」と変更された。

*平成2年(1990)の第6回からは、名界の著名人(原則として女性講師)や医学に関する講演

表1 東京女子医科大学学会総会シンポジウム

回	年(西暦)	テ ー マ
第23回	昭32(1957)	悪性腫瘍
第24回	昭33(1958)	高血圧
第25回	昭34(1959)	心臓疾患
第26回	昭35(1960)	麻酔
第27回	昭36(1961)	癌
第28回	昭37(1962)	リウマチの臨床
第29回	昭38(1963)	糖尿病
第30回	昭39(1964)	感染症
第31回	昭40(1965)	臨床検査法の進歩
第32回	昭41(1966)	癌の臨床
第33回	昭42(1967)	出血
第34回	昭43(1968)	各科領域における医原性疾患
第35回	昭44(1969)	リハビリテーション
第36回	昭45(1970)	交通災害
第37回	昭46(1971)	臓器移植
第38回	昭47(1972)	救急疾患の初期治療
第39回	昭48(1973)	各科の最近における Medical Electronicsの進歩
第40回	昭49(1974)	抗生物質使用法の進歩
第41回	昭50(1975)	二、三臓器癌の診断法の進歩
第42回	昭51(1976)	脳卒中の診断と治療の進歩
第43回	昭52(1977)	糖尿病学の進歩
第44回	昭53(1978)	救急疾患の初期治療
第45回	昭54(1979)	人工腎臓の発展と適応の拡大
第46回	昭55(1980)	内分泌疾患の臨床
第47回	昭56(1981)	画像診断の最近の進歩
第48回	昭57(1982)	医学教育に何を望むか
第49回	昭58(1983)	医療における死をめぐる
第50回	昭59(1984)	癌治療の進歩—癌治療の現況と問題点—
第51回	昭60(1985)	Agingと疾病
第52回	昭61(1986)	自己免疫疾患をめぐる
第53回	昭62(1987)	冠動脈疾患の治療
第54回	昭63(1988)	画像診断—最新の話
第55回	平1(1989)	内視鏡検査の現況と展望
第56回	平2(1990)	レーザーの医学への応用
第57回	平3(1991)	注目すべき感染症とその対策
第58回	平4(1992)	悪性リンパ腫
第59回	平5(1993)	分子生物学の臨床への応用
第60回	平6(1994)	高齢者の手術



図11 第1回彌生メモリアルレクチャー 昭和60年(1985)5月22日 澤地久枝氏の講演

表2 「東京女医学会」当時の座談会

会	年(西暦)	テ ー マ
第40回例会	昭13(1938)	「プロントジル」に就て
第41回例会	昭13(1938)	赤血球沈降反応に就て
第42回例会	昭13(1938)	血圧に就て
第43回例会	昭13(1938)	感冒に就て
第44回例会	昭14(1939)	肺炎に就て
第45回例会	昭14(1939)	ビタミン, 特にCに就て
第46回例会	昭14(1939)	止血に就て
第47回例会	昭14(1939)	止血に就て(続)
第48回例会	昭14(1939)	鎮痛に就て
第51回例会	昭15(1940)	腹痛に就て
第52回例会	昭15(1940)	腹痛に就て(続)
第54回例会	昭15(1940)	結核に就て
第55回例会	昭15(1940)	結核に就て(続)
誌上座談会	昭16(1941)	ビタミンBの各科より見たる応用
誌上座談会	昭16(1941)	ビタミンA, Dに就て
誌上座談会	昭17(1942)	性病に就て
誌上座談会	昭17(1942)	母性保護に就て

によって寄贈されたものを基金として昭和36年(1961)に発足。

*この奨励金が授与されるのは、「本学卒業生で学内において医学の研究に従事し、その研究成果が充分期待できる者」で若干名に与えられる(吉岡彌生研究奨励金規定第1条, 第2条¹⁴⁾)。

*第1回授与式は、昭和37年(1962)5月の114回例会で行われた。

藤井儔子(薬理学)「成長に及ぼす androgenic steroids の作用発現と性、年齢との関係」

小林成子(三神内科)「本態性高血圧症の臨床的研究」

(山川寿子研究奨励金について)

に加えて、吉岡彌生を親しく知る人が「彌生先生を語る」と題して、生前の吉岡彌生の業績や想い出について講演するようになった。

*平成6年(1994)で第10回を数えている。

(吉岡彌生研究奨励金について)

*毎年5月22日に行われる東京女子医科大学学会例会で、授与式と、前年度受賞者の研究発表が行われる。

*吉岡彌生の葬儀に供えられた香典が吉岡博人

*昭和23年(1948)卒業生の山川寿子の遺贈による寄付金を基金とし、「本学教職員で医学の研究に従事し、その研究成果が充分期待できる者」若干名に授与される(山川寿子研究奨励金規定第1条,第2条¹⁵⁾。

*毎年2月の例会で授与式を行い、翌年2月例会で研究発表を行う(第7条,第8条)

*昭和62年(1987)10月に制定される。第1回授与式は平成元年(1989)2月16日第277回例会であった。

大澤真木子(小児科学)「進行性筋ジストロフィー症の進展過程に関する研究」

内潟安子(第三内科学)「インスリン依存型糖尿病の発症機構に関する研究」

田中 徹(循環器内科学)「ホルター心電図による心筋虚血の評価」

小松 明(第一生理学)「Drosophila ミュータントを用いたCa感受性Kチャンネルの調節機構の研究」

〔吉岡博人記念総合医学研究奨励金について〕

*故吉岡博人名誉理事長の志を体して吉岡博光理事長の寄贈による寄付金を基金として、本学3教室以上(基礎教室を必ず含む)の共同研究で、その研究成果が充分期待できる研究に毎年1研究グループを選び助成する(吉岡博人記念総合医学研究奨励金規定第1条,第2条¹⁶⁾。

*毎年9月の学会総会で授与式を行い、研究成果は3年以内に総会で発表すること。

*平成4年(1992)2月26日制定。第1回授与式は、特に平成5年(1993)1月4日の学内年賀交歓会で行われた。

研究代表者 宮崎俊一教授(第二生理学)

共同研究者 内山竹彦教授(微生物免疫学)・押味和夫教授(血液内科学)

研究課題「細菌外毒素によるTリンパ球活性化およびキラーリンパ球による標的細胞障害に関わる細胞内カルシウムシグナルの研究」

〔佐竹高子研究奨励金について〕

*昭和8年(1933)卒業生の佐竹高子による寄付金を基金として、本学教職員で医学の研究に従事し、これまでの研究成果の水準が高い中堅研究

者(大学卒業後10年以上)若干名に授与される(佐竹高子研究奨励金規定第1条,第2条¹⁷⁾。

*毎年2月の例会で授与式を行い、翌年2月の例会で研究発表を行う。

*平成4年(1992)3月25日制定。第1回授与式が平成5年(1993)2月18日第293回例会で行われた。

日下部きよ子(放射線医学)「ヒト型モノクローナル抗体による悪性腫瘍の画像診断と治療に関する基礎的研究」

肥塚直美(第二内科学)「腫瘍中のインスリン様成長因子(IGF)およびIGF結合蛋白の異常に関する検討」

おわりに

還暦を迎えた学会の歩みを駆け足でみてきた。草創期における学会の目的は、女医として新知見の獲得だけでなく、社会的地位の確立でもあった。その後時代を経て、医学者として医学・医術の研究発表の場へと、学会の目的が変化していく様子を記述した。

学会は、女子医大の伝統を保持しつつ、日進月歩の医学の発展に貢献するために、先進的技術・学術交流に積極的に取り組むために、会員諸氏の尚一層の努力を必要としている。

学会の軌跡は、東京女子医科大学の歴史でもあり、会員による日頃の研鑽の発表の場としての学会誌の発行、例会・総会の開催など、これら一連の地道な活動が本学の隆盛のもとにもなっている。

ここ10年の詳細については、直接の関係者が多数活躍中であり、今後の発展のなかでより専門的な立場の記述が必要だと痛感する。

稿を終るにあたり、種々ご尽力いただいた大学史料室の佐藤淑子課長ならびにスタッフ一同に深謝いたします。

文 献

- 1) 吉岡彌生傳 東京聯合婦人會出版部(1941)
- 2) 東京女子医科大学小史 中央公論事業出版(1966)
- 3) 東京女子医科大学八十年史(1980)
- 4) 女醫界 252:15, 1934
- 5) 女醫界 253:3, 1934

- 6) 東京女醫學會雜誌 1:121-122, 1931
 - 7) 女醫界 254:6, 1934
 - 8) 東京女醫學會雜誌 4:207-222, 1934
 - 9) 女醫會 363:9, 1943
 - 10) 女子醫學研究 13:1, 1943
 - 11) 東京女子醫科大學雜誌 22(1):添付文書, 1952
 - 12) 東京女子醫科大學雜誌 23:29, 1953
 - 13) 東京女子医科大学学会入会の手引き (1993)
 - 14) 吉岡彌生研究奨励金規定
 - 15) 山川寿子研究奨励金規定
 - 16) 吉岡博人記念総合医学研究奨励金規定
 - 17) 佐竹高子研究奨励金規定
-